
今日も夜道を歩く

田中サイダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も夜道を歩く

【Nコード】

N0094B

【作者名】

田中サイダー

【あらすじ】

旅人は、ただ歩く。それが生きている証だというように。

夜の河は静かで少し不気味だ。水面が揺れて、映る月がポロポロと形を崩す。この世に生を受けてどれく

らいたったのだろうか。それすら、忘れてしまった。

草のベットに寝転ぶと、彼は頭の後ろで手を組んだ。ちょうど、曲げた肘が空に向かう様になる。優しく届いてくる虫の音、さやさやと微かに草の音。

永遠があるようだった。空は満天の星。

いつ見ても変わりなく目に映る。

風が吹いた。彼の頬や額を撫でて去っていった。

彼に名前は無い。付けられる前に彼は捨てられた。彼の中に肉親の記憶は無い。彼の国ではよく有る事だった。

朝、目を覚ますと一匹の黒い犬がちょこんと横で眠っていた。彼が体を起こした気配に気付いたようで、犬も欠伸をしながらも目を覚ました。

彼は何も言わず、ただ犬の瞳を見つめる。黒く、悲しそうな瞳。独りの彼を悲しんでいるのか、それとも独りな自分を悲しんでいるのか。それとも、全く違うことを考えているのか、彼には分からなかった。

彼は立ち上がり、背中に着いた草や土を払うと、犬の瞳をうかがった。おまえも一緒に来るかい？と、そう問うように。

犬は名残惜しそうに鳴いて鼻先を彼の足に押しつけるだけだった。彼は犬の頭を撫でてやるとさくさくと歩きだす。

犬は彼が見えなくなるまで歩いていった方を見続けた。

賑やかな市場は朝から混雑していた。あれから幾らか歩いてここに着いた。

彼の頭上を飛びかう言葉の中には時々、彼の知らないものもあった。

彼は水と、わずかな食料だけ買つと賑やかな市場をあとにした。

久しぶりの人間の塊は彼を想像以上に疲れさせていた。廃屋を見つけると彼はそこで休むことにした。

気が付くともう空は帳をおろし始めていた。いまから出歩くことは危険なので朝までここにお世話になることにした。

生温い風が彼を包み込む。それは不思議と不快ではなかった。藍から薄い赤紫、そしてわずかに橙。

美しい空。そして完全に夜へと変貌した。ぽつぽつとやわらかい橙の灯が灯り始め、それとともに夕食の匂いが鼻を擽る。急に胸を締め付けられるよ

うな感覚が走った。彼の、自分の、知らない匂い。知らない優しさ。全てがそこに詰まっていた。

彼は静かに泣いた。

何故、生まれ

てきたのか。何故、独りなのか。

何故、死ねないのか。

何故、生きてゆくのか。

狂いそうなほど独りで生きてきた。そして…明日も独りで生きてゆくのだろうか？

(後書き)

だから、駄文と言ったじゃないですか…。 いや、読んで
くださってありがとうございます。 感想くれなんて、おこがま
しいことは言いません。(あんまりにも駄文なんで) 本当、読んで
くださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0094b/>

今日も夜道を歩く

2011年1月29日03時45分発行